



日本イスパニヤ学会
Asociación Japonesa de Hispanistas
会報第 15 号 / Boletín Núm.15
2009 年 8 月 31 日 / 31 de agosto de 2009

事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10
アーバン大塚 3F (株) ガリレオ
学会業務情報化センター 東京オフィス内
Tel:03-5907-3750 Fax:03-5907-6364
e-mail:g004esp.mng@galileo.co.jp
ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajh/>

広報委員会編集部

〒618-0024 京都市右京区西院笠目町 6
京都外国語大学外国語学部スペイン語学科
坂東省次研究室 Tel:075-322-6121
e-mail: s_bando@kufs.ac.jp

目 次

卷頭言 ウナムーノと歩くサラマンカ 角田哲康	2
在外研究の思い出 ～アリカンテ大学にて～ 江澤照美	3
Muros と Noia の溺れ谷を訪ねて 福嶋典子	5
LOS NUEVOS EXÁMENES DELE A1 Daniel Arrieta	6
著者の周辺	
『スペイン・ラテンアメリカ図書ファイル』刊行に寄せて 片倉充造	9
編者の周辺	
『ラテンアメリカの教育改革』 牛田千鶴	10
書 評	
ハビエル・セルカス（宇野和美訳）『サラミスの兵士たち』 安田圭史	11
関 哲行『旅する人びと（ヨーロッパの中世4）』 椎名 浩	13
アデライダ・ガルシア＝モラレス『エル・スール』 森 直香	14
京都外国語大学スペイン語学科編	
『スペイン語世界のことばと文化 講演録』	16
新刊書紹介	17
国際学会情報	18
2009 年度 第 55 回大会のお知らせ	23
編集後記	24

巻頭言 ウナムーノと歩くサラマンカ

「あった！ あった！ あそこ！」 — 幸運のカエルを見つけ、指さす観光客たち。そう、ここはサラマンカ大学のファサード前。この大学に流れる知の歴史がそこから圧倒的な表現力で迫ってくる。指先をもう少し右に向ければ…。

そこにあるのは Casa-Museo Unamuno。ウナムーノがサラマンカ大学の総長職に就いていた間、居していた旧総長公邸。イス

パニスタならば、18世紀から歴代のサラマンカ大学総長のために用意されていたこの建物を知らない人はいないだろう。しかしファサードの写真を夢中で撮るたくさんの観光客の中で、どれだけの人が隣の建物にカメラを向けていることか。一年間留学していたのに気がつかなかつたという者さえいる位だから。

これに限らず、実はウナムーノに関わる場所はあまり知られていない。完成したばかりのエル・コルテ・イングレスから程近い Miguel de Unamuno と名付けられた通りに気付く人がどれだけいるだろう。人気のディスコの前にある家でウナムーノが亡くなったことを知らない留学生もいる。そこで今日は、ウナムーノをめぐってこの街を歩いてみることしよう。

Casa-Museo Unamunoのある Libreros 通りをカトリック大学の方へ。貝殻の家を左へと折れる。ゆったり下ると、左手に一際目を引く建物が見えてくる。アルバ公爵家の私邸となっている Palacio de Monterrey。プリスマ・プラテレスク様式で知られるこの建物は、1539年の完成前に隣接する教会と接触することが分かり、建物の計画が変更されたといいういわくつきのものだ。ここを左へと曲がる。La Purísima 教会の前を通ると、右手に緑の公園が見えてくる。Campo de San Francisco だ。1891年、ウナムーノは新婚早々サラマンカ大学に赴任してきた。そしてサラマンカで最初に住んだ家は、この公園と Carmelitas 通りに挟まれた小さな家だった。季節の移り変わりをこの公園や隣のウルスラス修道院の木々で感じとれたこの家を、ウナムーノはとても気に入っていた。

1893年の終わりも近づくと、ウナムーノはこの家から引っ越しすることになる。妻コンセプシオンが二人目の子供の出産を控えており、手狭になったからである。移った先は、Carmelitas 通りを Mirat 通りへと進み、Puerta de Zamora の少し先。Plaza de Gabriel y Galán に面したところ。ウナムーノは1900年総長になるまでここに住み続けた。『生粋主義をめぐって』(1895) や『戦争の中の平和』(1897) などの作品をこの家で書き上げた。

その一方、ウナムーノは根源的な体験をすることになる。1896年に生まれた三男ライムンドの病に端を発する「宗教的危機」である。1897年3月末のある夜中、ウナムーノは発作とも言える大きな精神的動揺を受け、妻の「¡Hijo mío!」という呼びを背に一人家を出た。おそらく Mirat 通りを Plaza de España へと進み、Gran Vía へと進んだことだろう。向った先是 Gran Vía の奥左手に座するサン・エステバン修道院。1610年に完成したゴシック様式とルネッサンス様式から成るファサードは、プラテレスク様式のサラマンカ大学ファサードと並び、サラマンカを代表する建造物。神父にならねばという思いに苛まれた幼きウナムーノ。マドリッド中央大学時代には、一転して教会と距離を置き始めた若きウナムーノ。科学による幸福を信じていた壯年ウナムーノが救いを求めて辿りついた場所は、皮肉にも友人の神父



角田 哲康

がいる修道院だった。

1900年10月、サラマンカ大学総長となったウナムーノは、今日の散策の出発地、Libreros通りの総長公邸に移ることになった。ウナムーノは生涯10人の子供を授かるが、この家で最後の4人の子供が生まれた。2年後の1902年、三男ライムンドは息を引き取る。話すことも立ち上がることもできなかつたこの息子の姿を、ウナムーノは描き続けた。それらの絵はCasa-Museo Unamunoで今も見ることができる。この家で『愛と教育』(1902)、『ドン・キホーテとサンチョの生涯』(1905)、『生の悲劇的感情』(1913)等の作品が生み出された。哲学者として、そして教育者として充実した時がこの家で過ぎていく。

1914年の夏の終わり、ウナムーノに一通の手紙が届けられる。サラマンカ大学総長解任の通知である。ウナムーノは、総長公邸を後にし、Bordadores通りに移ることになった。ウルスラス修道院を目の前にするその家は、ウナムーノがサラマンカで初めて居を構えた場所の近くであった。こじんまりとした入り口からは思いつかないほど奥行きがあるこの家の通りに面した部屋を、ウナムーノは仕事部屋とした。バルコニーからは左手にPalacio de MonterreyやCompañía通り、そしてカトリック大学を眺めることができた。『ベラスケスのキリスト』(1920)等がここから世に出た。

1924年2月に国外追放されたウナムーノは、一人この家を出ることとなる。1930年に帰国し、1931年の第二共和制の発足とともに公職に就いたウナムーノは、一年ほどマドリッドで長女サロメ夫妻と過ごした。その後サラマンカに戻るが、1934年にはZamora通りでクリニックを開業する二人の息子達の家で数ヶ月過ごすことになる。この家で長年連れ添ってきた妻コンセプシオンは息を引き取る。

失意のウナムーノは再びBordadores通りの家に戻る。1936年8月から10月の間に繰り返された総長罷免・再任の騒動を経て、12月31日ウナムーノはこの家で天に召された。

年が明け、ウナムーノは旧市街の北西にある市民墓地に埋葬された。その南に広がるのが、現在のCampus Miguel de Unamuno。

ウナムーノが最も充実した時を過ごしたサラマンカ大学ファサード隣の総長公邸。そして静かに家族と眠るその場所から見守るのが、ウナムーノの名を冠したキャンパス。この小さな街のひとめぐりは、ウナムーノとサラマンカ大学の深いつながりをあらためて感じさせてくれる。(すみだ・てつやす 日本大学)

在外研究の思い出 ~アリカンテ大学にて~

江澤 照美

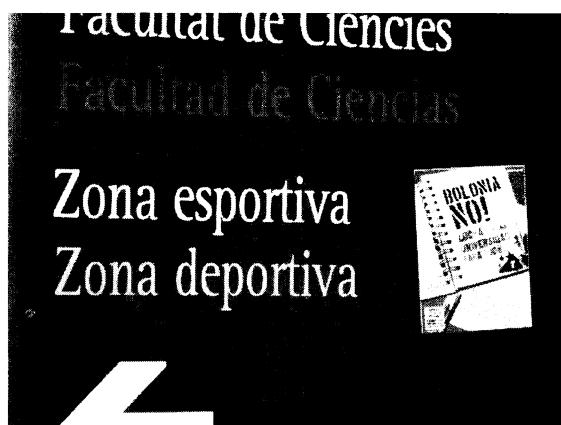
2008年度に在外研究を目的としてスペインに長期滞在した。本務校の協定大学の一つであるアリカンテ大学に客員研究員として受け入れていただき、10カ月の間充実した日々を過ごすことができた。在外研究の主要目的はスペイン国内における「外国語としてのスペイン語教育」(以下「ELE教育」と表記)の現状と今後の動向を探ることにあったが、スペイン国内の二言語併用地域の言語事情もかねてから筆者が関心を寄せているテーマであり、そういう

意味で世界中から多くの留学生や研究生を受け入れ、かつ二言語併用地域に設立された大規模な高等教育機関の一つであるアリカンテ大学を主要研究先に選んだのは正解だったと思っている。アリカンテ市郊外にある大学キャンパスの近くに住み、研究活動を開始したが、大学関係者の方々には多方面で便宜をはかっていただいたことを今も非常に感謝している。

昔は空軍基地だったという広大な大学キャンパスは常に地中海沿岸の温暖な気候に合った樹木や草花に彩られ、植物園のようなエリアや美術館さえあり、落ち着いて勉強できる環境が整っていた。キャンパス全域で無線 LAN が使用できるため、学生の大半がノートパソコンを所持していて、図書館自習室から芝生の上に至るまで好きなところでネットにアクセスしている姿を日常的に見かけた。

学内では常に何らかの催しがあって、専門家の講演や座談会、女性学研究所が主催する公開講座など筆者の興味をひく集まりには時間の都合がつく限り参加するようにした。

また、この地方はバレンシア語とカスティーリャ語の二言語併用地域であり、大学キャンパス内での掲示の大半は地方内のみならず学内の公用語でもある両言語での表示がほぼ徹底されていたことが印象に残っている。



日本で大学教員をしている自分にとっては、現在のスペインの大学の教育現場もその実情を知りたいものの一つであった。現在のヨーロッパではボローニヤ・プロセスと呼ばれる高等教育制度の抜本的な改革が進行中で、スペインの各大学も進捗状況に差はあるものの、学位制度の見直しや単位互換制度の整備などが実施されつつある。アリカンテ大学にもそんな改革の産物の一つと言えるマスターコースが新設されていたが、ELE 教育関係のマスターコースの授業を聴講させてもらい、「ヨーロッパ言語共通参照枠」に立脚した言語教育が今後のスペインにおいてますます推進されることを確信した。また、一部の学生がアリカンテ大学キャンパス内で敢行していたボローニヤ・プロセス反対運動の数々を目の当たりにし、日本とスペインの大学生の気質や大学制度の違いについても大いに考えさせられた。

在外期間中、ほとんどアリカンテに滞在していたが、セルバンテス協会や UIMP の講座受講、語学学校・ティキスト会社主催のワークショップ参加、所属学会の大会参加、その他調査のために短期の国内旅行をすることもあり、そこでさらに多くの人々の知己を得た。移民の子弟向けの ELE 教育に携わる教育者にもそのような場で何度か出会った。国内で増加する一

方の移民に対する言語教育の需要も確実に増しているようだ。

10ヶ月はこうしてまたたく間に過ぎてしまった。今回の在外研究で自分が得たものは計り知れないが、今後の自分の研究や授業にその成果を反映させねばならないと思っている。もつとも帰国した途端に忙しさに明け暮れる毎日を過ごす羽目になり、持ち帰った資料をいまだにきちんと整理しきれていないという情けない現状にはまったく困っているのだが。

(えざわ・てるみ 愛知県立大学)

Muros と Noia の溺れ谷を訪ねて

福嶋 典子

Semana Santa の休暇第1日目、留学先の Santiago de Compostela から海岸部へクラスメートたちと車で出かけた。その朝、冬の湿った寒さからやっと解放されると期待を込めて春のワンピース、用心のためにブーツを履き、傘を持って行ったのを覚えている。

西へ1時間ほど車を走らせると、Rías Baixas の最初の溺れ谷に建つ Noia に到着する。中世以後 19 世紀まで、Santiago の大司教領地の港として機能した小さな町である。海岸沿いの散歩道近くのパーキングで車から降りると懐かしい海の匂いはするものの、故郷の港とは異なる風景が眼の前にひろがっていた。遠い昔の港としての面影も今はなく、長い年月をかけて流れ込んだ川からの堆積物によって小型の漁船しか出入りできなくなった小さな入り江が残るだけである。

海岸から町の中心部に向けて5分ほど歩くと並木道に出る。そこから旧市街に向けて進むと左手に市庁舎が見える。その建物自体には重要性はないが、取り壊されたいいくつかの歴史的建造物の一部を移築して保存している。たとえば、町の名前の由来となった伝説（創世記洪水物語のノアが町を設立したとするもの）が彫られた Hospital de Sancti Spiritus の扉の尖頭アーチ（14世紀）をホールで見ることができる。

旧市街では、毎年そこで Feria Medieval が開催されている Calle de Curro に向けて歩いた。通りの名前からも明らかなように、中世、牛を囲い込んで2階から石を投げるといった原始的な形の闘牛が催されていたそうである。通りの先には San Martiño 教会が見える。バラ窓からステンドグラスを通して差し込む光と唯一のネーヴ、再度目を上に向けると木製の天井、初めて見るマリニーラ・ゴシック様式の教会であった。Plaza del Tapal からそのファサードを見上げると、どこか見慣れた感じがした。後になってサンティアゴの大聖堂の Pórtico de La Gloria を模して作られたものだと知った。広場を囲むバルのテラスでは昼食前のワインとおつまみの時間が始まったようだった。私たちは Noia から 30 分ほど車で走った Muros で新鮮なシーフードを食べることに決めた。

溺れ谷の先端近くに位置する Muros は、中世以後、海からの侵略に対して監視塔の役割を担ってきた町である。魚市場の駐車場で降りたこと也有って、水産業の港町特有の空気を感じた。海に背を向けて歩いて行くと急な坂道が続いている。しばらく歩いて上から町を見渡すと、海と山の間に長い帯のように町が広がっているのが見えた。進路を変えて海に沿って

歩くことにした。花崗岩のアーチが並ぶ回廊には、商店や飲食店が建ち並んでいる。この長い柱廊はかつて、貴族達の住居に付属する私的空间であったと同時に公的空間として、彼らに仕える漁師達が漁船や漁具を置き、雨の日には露店が立ち、また子供達の遊び場となり、行商人が開けたワイン樽を囲む酒場ともなった。歩き疲れたころに通りかかったバルに立寄り、昼食をとった。pimientos de Padrón、zamburiñas al ajillo、calamares fritos をつまみ、穏やかな土曜日の港の風景を眺めながら、会話を楽しんだことが印象に残っている。歴史に詳しいクラスメートが、ゴヤの肖像画でも知られる啓蒙主義の作家で政治家のJovellanosが、独立戦争時この町に亡命していて、ガリシアの自由主義者達と談笑していたその時、ナポレオン軍が町を焼き払ったという出来事を語った。他のクラスメートは、calle del Trueno、Sufrimiento、Esperanza、Venus といった詩的な通りの名前に注目していた。

帰国の日が近づく今、あの時は海を見ながら日本の家族を憶っていたが、もうじき故郷の海からガリシアでの留学の日々を思い出すだろう、と少しさびしく感じている。

(ふくしま・のりこ 清泉女子大学)

LOS NUEVOS EXÁMENES DELE A1

Daniel Arrieta

El pasado 16 de mayo se celebraron los exámenes DELE correspondientes a la primera convocatoria del año 2009. Hasta ahora se ofrecían pruebas en los niveles Inicial, Intermedio y Superior, que a su vez se corresponden con los niveles B1, B2 y C2 del Marco Común Europeo de Referencia (MCER). Pero en esta ocasión también se ha realizado por primera vez el examen DELE A1, dirigido a estudiantes principiantes de español que “pueden desenvolverse en situaciones de comunicación sencillas, relativas a áreas de necesidad inmediata o a temas muy cotidianos”.

Los Diplomas de Español como Lengua Extranjera (DELE) fueron creados en 1988 y son títulos oficiales, acreditativos del grado de competencia y dominio del idioma español, que otorga el Instituto Cervantes en nombre del Ministerio de Educación de España. Son reconocidos en todo el mundo por empresas privadas, cámaras de comercio y sistemas de enseñanza públicos y privados.

Desde 1990, año del comienzo de los exámenes DELE en Japón, hasta la fecha, la cifra de candidatos en los distintos niveles ha sufrido aumentos considerables. En la siguiente tabla podemos observar dicha tendencia.

Tabla 1. Número de inscripciones en los exámenes DELE en Japón

Año / DELE	INICIAL B1	INTERMEDIO B2	SUPERIOR C2	TOTAL
1990	0	34	5	39
1995	14	50	21	85
2000	178	194	78	450
2005	246	304	99	649
2007	251	316	91	658
2008	349	429	123	901

De dichos datos se pueden sacar algunas conclusiones sobre la evolución de la popularidad de los exámenes DELE en Japón:

- El aumento del número de inscripciones ha sido la norma dominante desde la implantación del examen en el año 90, con primacía del nivel Intermedio B2 frente a los demás niveles, seguido de cerca por el DELE Inicial B1.
- Específicamente en el año 2008 hubo un aumento mucho mayor respecto a períodos anteriores, tanto en términos absolutos (243 candidatos más) como relativos (un 37% más). Este reciente incremento en la tendencia se debió a la apertura en Tokio en septiembre de 2007 de una nueva

sede del Instituto Cervantes, que ha venido organizando cursos de español, eventos culturales y promocionando tanto la cultura hispánica como los exámenes DELE en Japón.

Los datos de la convocatoria de mayo –la próxima convocatoria será en noviembre– continúan la tendencia comentada, especialmente gracias a la aparición del nuevo examen DELE A1, como puede observarse en la Tabla 2.

Tabla 2. Número de inscripciones en los exámenes DELE en Japón (convocatoria de mayo)

Año / DELE	A1	B1	B2	C2	TOTAL
2008 (mayo)	0	127	189	63	379
2009 (mayo)	92	134	199	64	489

A pesar de ser la primera ocasión en la que se ofrecía dicho examen A1 y de no existir apenas materiales para su preparación -recientemente la editorial EDELSA ha publicado un manual que incluye siete modelos de exámenes completos-, la acogida ha sido bastante satisfactoria. Teniendo en cuenta la idiosincrasia de la enseñanza del español en Japón, este nivel A1 puede alcanzar el número de candidatos del B1 o el B2, o incluso superarlos en algunos años.

En mayo y noviembre de 2010 están previstas respectivamente las incorporaciones de los nuevos niveles A2 y C1 al conjunto de exámenes DELE, con lo que finalmente quedarían constituidos 6 niveles en corcordancia con el Marco Común Europeo de Referencia: A1, A2, B1, B2, C1 y C2.

El reto al que se enfrenta en el futuro el examen DELE en Japón y, por ende, la sede de Tokio del Instituto Cervantes, es continuar la tendencia al alza en el número de candidatos. La mencionada incorporación de dos nuevos niveles en 2010 puede ayudar a ello, aunque es necesaria una campaña de promoción del nuevo sistema final de niveles del examen. En este sentido, el apoyo y las conferencias de la responsable del DELE en Japón del Instituto Cervantes, Natalia Barrallo, en diversas universidades del país, son un paso adelante hacia dicho objetivo. La popularidad en Japón de la enseñanza de idiomas a través de Internet, y la posibilidad de realizar cursos de preparación para los exámenes DELE on line en el Aula Virtual de Español (AVE) del Instituto Cervantes también suponen una ventaja.

Las actividades culturales del Instituto Cervantes son un estímulo muy importante para la promoción del aprendizaje del español en Japón que también afecta de manera indirecta a los DELE, aunque hasta ahora dicha promoción cultural básicamente se ha limitado a Tokio. De hecho, si comprobamos el desglose de datos de inscritos por centros de examen entre 2006 y 2008, veremos que del incremento total de 274 inscripciones, 221 (el 81%) corresponden a Tokio. Otras áreas de Japón, especialmente Kansai –con ciudades como Osaka, Kyoto y Kobe-, con numerosas escuelas y universidades que enseñan español, también serían muy receptivas a dichas actividades culturales y podrían suponer otro empuje para el DELE similar al del año 2008 en Tokio.

Desde algunas universidades en Japón, profesores nativos, normalmente ocupados en enseñar clases de conversación y cultura, han comenzado a preparar a sus estudiantes de español para el DELE; esto animará a los universitarios japoneses, generalmente preocupados por la supuesta dificultad del examen, a perderle el miedo y tomarlo. Por ejemplo, desde este año, en la Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto, estamos ofreciendo como clase optativa semestral una preparación para el examen DELE Inicial B1 y la acogida ha sido bastante buena. En esta clase, los estudiantes tienen la oportunidad de, con anterioridad, enfrentarse a las distintas partes del examen en un ambiente relajado con la guía y los consejos del profesor. También realizan numerosas prácticas de interacción oral similares al examen, con lo que la parte que más tensión genera en los candidatos, el día del examen se convierte en un ejercicio más.

Los exámenes DELE, por un lado, son un signo del interés que suscita el español y la cultura hispánica en la población japonesa. Pero, por otro, también proporcionan prestigio internacional al idioma y a la cultura, y pueden motivar a muchas personas en Japón a continuar estudiándolo y practicándolo. Por ello, el desarrollo y el éxito de dichos exámenes DELE nos beneficia a todos los que de una u otra manera trabajamos en el ámbito del idioma español. (ダニエル・アリエタ 立命館大学)

【著者の周辺】

『スペイン・ラテンアメリカ図書ファイル』(沖積舎、2009年)刊行に寄せて

片倉 充造

本書は文字通り、スペイン・ラテンアメリカ地域を対象とする、とりわけ人文分野の邦文・邦訳書についての「書評」の集成であり、I スペイン編 31本、II ラテンアメリカ編(メキシコ 16本、グアテマラ以南～アルゼンチン 16本)そして III その他 19本、都合 80 本以上を収載している。

“Toda España está metida dentro de El Quijote.” (スペインのすべてが『ドン・キホーテ』の中にある)という碩学ダマソ・アロンソの名言を盾(?)に I スペイン編の約 1/3 は、マダリアガ、ナボコフ、カナヴァジオ、フエン特斯他を著者とする、セルバンテス『ドン・キホーテ』の関連書で占められている。さすが世界的大著、破格の存在感であると言えよう。また、セラ、カソナ、ロルカ、ロサリア・デ・カストロについてもわずかながら紹介し、一定のバランスを保つことに努めた。(それにしても気安くダマソ・アロンソの至言に依存してしまったのは、マドリード国立語学校=EOI 留学時代の評者の恩師が、あの博雅の教え子であったという親近感に助けられてのものなのかも知れない。)

II ラテンアメリカ編についてメキシコとペルーの原稿が多く目立つのは、後年の評者の留学先が、メキシコシティに程近いメキシコ州都トルーカ所在 UAEM(メキシコ州立自治大学文学科)であり、そこでメキシコならびにペルーのインディヘニスモ小説(先住民の社会的復権に留意した文学作品)を比較・検証し、論稿を同大学ならびに外務省(SRE)に提出した経緯によるものである。広義的にはメキシコ革命小説(ロペス・イ・フエン特斯の『インディオ』)そしてホセ・マリア・アルゲダス(『深い川』までの諸作品)をその当時読み込んでいた作業の反映である。

III その他では、両地域に広く関係する一般書・案内書・文芸作品等を揃えている。一見雑然と並んでいるようではあるが、ルセーノ『マスク・オブ・ゾロ』(奥村章子訳、1998)＝南塚信吾『義賊伝説』(96)＝『アウトローの世界』(99)は、“義賊物”としてのまとまりがある。別けてもゾロは、米・墨間の歴史的・文化的・社会的緊張関係や対照を描くフエン特斯『老いぼれグリンゴ』(安藤哲行訳、94)への導入材料でもあり、大学での授業科目「文学概論」では有効であった。坂東省次『文化と歴史で学ぶスペイン語』(2000)＝ピーター・フランクル『外国語習得術』(同)は、スペイン語を外国語として本格的に習い始める大学生にとって、同じく『井上ひさしの作文教室』(01)＝清水義範『大人のための文章教室』(04)は、外国語に限らず自国語の表現能力を擁する社会人となるうえで、いずれも基本図書として区分されるだろう。

以上本書の概要を簡単に振り返ってみたが、「あとがき」にも触れたとおり、著者が大学人としての業務のほかに「書評」を発表するようになった契機は、『人文学研究所報』(No. 27、92 神奈川大学人文学研究所)であり、『グリオ』(8号、現代世界と文化の会、94)であり、地元紙『奈良新聞』(1996～読書欄担当)での原稿掲載であった。時間的余裕にもよるが、講読図書のテーマが明確で体系的な場合には、『アメリカ研究』(天理大学アメリカ学会誌)や『京都ラテンアメリカ研究所報』(京都外国語大学)もしくは『イスパニア図書』(行路社)、『國

文学』(學燈社)、『図書新聞』等での論稿発表となった。

本年5月末には《天理大学公開講座》のプログラムとして、本書を底本に〈「書評」で読み解くスペイン・ラテンアメリカ文学〉を開催する機会に恵まれた。本書の構成順に、I スペイン編ハイメ・フェルナンデス『ドン・キホーテへの招待』(柴田純子訳、1985)、壽里順平/原輝史編『スペインの社会』(98)、II ラテンアメリカ編フエンテス『埋められた鏡』(古賀林幸訳、96)、エンシーナス弥生『メキシコ人』(01)、マルケス『愛その他の悪霊について』(旦敬介訳、96)、III その他『家政婦は見た! 石崎秋子のぞき見日記』(97) 他を題材に関連の映画・映像を活用しながら解説したところ、『家政婦 -』が、付録されるヒロイン石崎の履歴書を含め、現代日本の“セレスティナ”=ピカレスク文学然とした読解として好評であったことを付記しておく。おそらく聴講して頂いた一般参加者には比較的の理解しやすかったのだろう。

若手執筆者も含め、様々な「書評」活動の展開があつてもよい、それがスペイン(ラテンアメリカ)学研究の裾野を拡げると考えるのが評者からのメッセージである。

(かたくら・じゅうぞう 天理大学)



【編者の周辺】

牛田千鶴編著『ラテンアメリカの教育改革』(行路社、2007年)

牛田 千鶴

ラテンアメリカ地域は実に多様な特色を有している一方で、スペイン・ポルトガル等の植民地であったという歴史的背景から、文化的・社会的共通性も顕著である。国民国家建設や近代化といった課題と不可分に結びついてきた「教育」の役割についても、独立期から現代に至るまで、各時代の潮流を反映した共通の地域的特性が見出せる。南山大学ラテンアメリカ研究センター研究シリーズ第1巻として刊行された本書は、地域研究の一環として「教育改革」に焦点を当て、比較分析のための事例を提示することによって、ラテンアメリカの地域的特性を浮き彫りにしようとするものである。

さて、本書は3部構成から成る。第I部<ナショナリズム・「国民」の形成と教育改革>では、第1章(齊藤泰雄)でまずチリの事例が紹介され、1973年の軍事政権誕生に至るまでの同国の歴史的伝統ともいえる「教育する国家」("Estado Docente")理念の形成過程と、その理念の下で展開された教育制度整備拡充政策の検討がなされている。第2章(青木利夫)では、20世紀前半のメキシコで、教育の全国的普及の権限掌握をめざした政府による教育の「連邦化」が、国家と住民の両者に何をもたらしたのかが探究される。第3章(林みどり)では、20世紀初頭のアルゼンチンにおいて、南欧・東欧出身者を中心に異なる文化的背景を持つ移民たちが、地域社会のダイナミックな教育力によって活字と出会い、読書という自主的な行為を通じ国民意識に目覚めていった様子が生き生きと描かれている。

第II部<政治的マイノリティをめぐる教育改革>では、モラレス政権下のボリビアで推進される教育改革を第4章(重富惠子)でとりあげ、先住民と国民統合という側面から検討を加えている。第5章(松久玲子)では、政治的マイノリティとしての女性に焦点を当て、メ

キシコ革命期におけるジェンダー規範の形成過程について、「母の日」の学校行事化等を分析しつつ考察がなされている。またブラジルに関する第6章（野元弘幸）では、文字を持たないことで周縁化されてきた人々に着目する一方、国境を越えた労働力移動に伴い国内の教育問題がグローバル化している現状についても言及している。

第Ⅲ部＜新自由主義下の教育改革＞では、1990年代に基礎教育行政の分権化と貧困地域における教育補償プログラムが始まったメキシコの事例を第7章（米村明夫）でとりあげ、そうした取り組みに対する分析と評価を試みている。第8章（三輪千明）では、世界に先駆けて新自由主義教育政策を導入し、質と公正の確保という教育課題に向けて積極的役割を担ってきたチリ政府の近年の政策展開を追っている。第9章（江原裕美）では、中等教育学校（高校相当）と職業技術教育を再統合する方針が打ち出されたブラジルを分析対象とし、進学準備と労働者育成の間で揺れながらも拡大する同国中等教育の今後の課題を探っている。最後に第10章（拙著）では、教育の民主化と国家再建をめざした1980年代の民衆教育の経験を経て、1990年より自由主義政権が3期続いたニカラグアにおいて、教育の拡充とともに格差が進行していった背景と要因に関し考察をおこなっている。

本書には当初、グアテマラとペルーの事例も加わる予定であったが、残念ながら収録が叶わず、ラテンアメリカ20カ国中、メキシコ・ニカラグア・ブラジル・ボリビア・チリ・アルゼンチンの6カ国の事例を紹介できたに留まった。とはいっても、ラテンアメリカにおける教育の実情を扱う文献が依然充分とはいえない現状にあって、本書を無事世に送り出すことができたのは有意義であったと考える。ラテンアメリカ社会の一端を知る手がかりとして本書が多少なりとも活用され、同地域への理解を深める一助となれば幸いである。

（うしだ・ちづる 南山大学）

【書評】

ハビエル・セルカス（宇野和美訳）『サラミスの兵士たち』、河出書房新社、2008年

安田 圭史

本書は2001年、スペインでベストセラーになった小説である。その根強い人気から現在まで24ヶ国語に翻訳され、この度ついに日本でも出版された。2002年にはスペイン人の若手監督、ダビッド・トルエバによって映画化され、話題作となった。

本書のテーマはスペイン内戦（1936年～1939年）である。この戦いは共和国軍と反乱軍に二分され、後者の勝利で1939年4月に終結するのは周知の事実であるが、物語の軸となるのは、その直前の1939年1月、カタルーニャの山村、クリエイで起こった集団銃殺事件である。すでに敗色濃厚であった共和国軍が反乱軍の兵士を行ったこの銃殺を奇跡的に免れ、逃亡することができた者のひとりに、ファシズムを標榜するフラン西党の大物であった実在の作家、ラファエル・サンチェス=マサス（1894年～1966年）がいた。本書は、著者の「分身」である中年の新聞記者、ハビエル・セルカスがこの出来事に关心を持ち、サンチェス=マサスとその事件に関わった人々について調べ始める現代から始まる。

本書は3部から成る。その1部は「森の友」とタイトル付けされている。これは、銃殺から逃れたサンチェス＝マサスを見つけながら、撃たなかった共和国軍のひとりの兵士と、また共和国軍から逃走し、クリエイに潜伏していたところ、逃亡中のサンチェス＝マサスと出会い、陣営は異なるものの、奇妙な友情で結ばれる3人の兵士たち（ペラ、ジョアキン・フィゲラス兄弟、ダニエル・アンジャラッツ）の両方に言及している。これらの出来事の詳細は、セルカスが行う、後者の3名の元兵士たちへのインタビューを通して、次第に明らかになっていく。本書の出色な点は、このように現在と過去が複雑に絡み合いながらも、60年以上前の銃殺という出来事の核心に、セルカスの語りを交えつつ、ルポルタージュ的に迫っていくところである。

続く2部では、サンチェス＝マサスの生涯が内戦前、内戦中、内戦後に渡って展開される。ここでは、大半の部分でサンチェス＝マサスが主人公となり、物語の色合いがより強くなっていくが、同時に銃殺の真相についても詳述されている。その中でも特に興味深いのは、サンチェス＝マサスと一緒に逃亡中であった共和国軍の兵士たちに言った「いつか、このことを本に書こう。『サラミスの兵士たち』という題名で」（143ページ）という一節である。しかし、サンチェス＝マサスは内戦後、勝者側のフランコ政権初期に閩僚を務めたということもあり、一市民である「森の友」との接触を避け、彼らについても多くを語らなかった。もちろんサンチェス＝マサスの手による『サラミスの兵士たち』も上梓されることはない。

3部では、セルカスが、サンチェス＝マサスを撃たなかつたもう一方の「森の友」であるかもしれない元兵士、アントニ・ミラリエスを探す現代に再び戻る。セルカスは、彼が現在、フランスのディジョンの老人ホームで生活していることを知り、インタビューを試みる。そこで、82歳となったミラリエスは戦争で亡くなった同志を指して、「やつらの時計は止まっているからな。同じように若いまま、私にたずねるんだ。なんでおまえはこっちにいないんだと」（245ページ）と語る。そしてセルカスはミラリエスが亡くなったときを想い、その時点で「彼の友人たちは完全に死んでしまう。彼らが死なないようにおぼえている者がだれもいなくなってしまうのだから」（246ページ）と記している。このセルカスの懸念こそが、サンチェス＝マサスが決して書かなかつた『サラミスの兵士たち』を、60年以上の年月を経て実現に向かわせるひとつのきっかけになっているのである。

このように、本書は、ルポルタージュと物語、現在と過去といった多様な要素を織り交ぜながら、最終的にスペイン内戦経験者の高齢化とその記憶の風化という問題に鋭く切り込んでいる。セルカスは様々な証言を求めて、カタルーニャやフランスを頻繁に行き来しているが、これは存命の内戦経験者が決して多くはなく、また年々減少しているスペインの現状を示している。本書が読者の関心を引いているのは、単なる小説としての面白さにとどまらず、多くの人々にいわば、スペイン内戦の希少な「語り部」として捉えられているからに違いない。（やすだ・けいし 立命館大学）



【書評】

関 哲行『旅する人びと（ヨーロッパの中世4）』
岩波書店、2009年

椎名 浩

本書は、中世ヨーロッパ世界をいくつかの視点・切り口から、包括的にかつ多面的に捉えようという意図で企画された、全8冊シリーズの一つである。したがって同時期のヨーロッパ全体に目配りして記述された本書であるが、この約30年間わが国におけるスペイン中世史研究を切り拓きかつリードしてきた関 哲之氏（以下「著者」）の名を聞いた本誌の読者諸賢の期待にたがわず、その随所にスペイン（中世においては「イベリア半島」という方がよりふさわしいが）に関する記事が盛り込まれている。

同時に、著者が長年研究対象としてきたサンティアゴ巡礼（著者の人選の理由がここにあるのは言うまでもない。随所でその成果が生かされているが、特に第2章「祈りと贖罪の旅」参照）は言うに及ばず、イベリア半島の中・近世史自体が、まことにこの「移動」「旅」「異世界との接触」というテーマにふさわしいエピソードや登場人物に満ちていることに、本書を通読して今更ながら気付かされる。曰く、レコンキスタ、エル・シド（133—135頁）、エンリケ航海王子、ヴァスコ・ダ・ガマ、コロンブス（277—280頁）、マゼラン、コンキスタドール（280—283頁）、ラス・カサス、今も昔もスペインの通俗的イメージを形成するところの大ジプシー（ロマ）（262—264頁）、そして本誌にとっては欠かせないドン・キホーテと、その生みの親セルバンテスその人。

これに、異文化間の交流や葛藤、強いられた「移動」に関わる、いわば「内的な旅人」ともいるべきモサラベ、ムデハル、セファルディ（257—262頁）、コンベルソ、モリスコ（190—193頁）、翻訳学校（154—159頁）、異端審問（184—190頁）、奴隸貿易（264—270頁）、マイモニデス、トウデラのベンヤミン（97—101頁）、レオ・アフリカヌスといったキーワードや人物を加えるならば、この半島の歴史の特徴がより際立つであろうし、それは中世ヨーロッパを、ヨーロッパ外の世界との関わりも視野に入れた上で、全体として把握することにも少なからず貢献するに違いない。ゆえに実に当を得た著者の人選である、というのはひとり評者の身びいきであろうか。

ここで、既に言及した第2章を除く本書の構成を紹介すると、「『他所』への憧憬」と題し、アダムとイブの楽園追放と『ギルガメッシュ叙事詩』から説き起こされる序章に始まり、第1章「移動の動機と条件」、第3章「移動と労働」、4章「学びと説教（伝道）の旅」、第5章「外交交渉と儀礼の旅」、第6章「女性とマイノリティ」と進む。

「超克される異界」と題する終章においては、中世ヨーロッパ社会における移動の特質がまとめられた上で、その移動を支えていた世界観を結果においては突き崩すものの、その当初においては中世的移動のパターンと心性が「あふれ出る」性格を濃く帯びたものとして、ヨーロッパ（イベリア）発の近代世界システムの始動（いわゆる「大航海時代」）が展望され、そのインパクトは「南蛮貿易」の時代の日本をも巻き込み、17世紀のリマに残る、長崎出身と思しき日本人の記録が紹介されて筆が置かれる。

以下紙面も限られてきたし、そもそも本書は多岐にわたる豊富な記事が盛り込まれていて、

実際に手に取られた読者諸賢が各々の興味に従って話題をチョイスされても十分に楽しめるので、評者もそれに甘えさせていただく。コレヒドール制を中心に、中世末～近世初頭の制度史を勉強してきた評者にとっては、権力・国家の機能に果たした「移動」の役割に言及した第5章は興味深いものであった。カスティーリヤ王国とティムール帝国の修好を目指したクラビホ（208—213頁）をはじめとする外交はともかく、宮廷や裁判が「旅人」の範疇に入れられているのは、近代的な感覚からすると違和感を覚えるかもしれないが、評者にとってこのことは得心が行くだけでなく、制度史上王権の「勅任官僚」と呼ばれているものも、一種の「国内移民」と考えると、近世初頭の王権の制度を支えた人的ネットワークや心性の一端が理解できるのではないか、と漠然と考えていた評者は、本書の記述に触れて意を強くした次第である。ヨーロッパ屈指の宮廷社会を擁した近世のスペインが、当時に世界規模の移動を行う人材を輩出したことも偶然ではあるまい。

折しも評者は本稿の執筆を、日本人の多数が例年の行事の如く国内外への移動を行う、2009年の「ゴールデン・ウイーク」中に進めている。世界各地の風物を居間にいながらにして楽しみ、自然の景観に切り込む人工物の極致とも言うべき高速道路網の映像を見るにつけ、「T O図」の外周に驚異の異界を思い描き（283—285頁）、道路も橋も圧倒的に手ごわい自然の中に埋没せんばかりであった（14—17頁）時代からは隔世の感があるようと思える。しかしひるがえって、例えば「情熱の国スペイン」といった決まり文句が旅番組や観光ツアーで用いられ、「予定された世界」を確認する作業が旅先で行われている時、現代人も中世人からどれほどへだ立っているものかとも思う。グローバル化した近代世界の観光業はさらに、行き先の景観や生活の方を「期待する姿」に整える方法論すら身に附いている。また内外の報道は「新型インフルエンザ」の流行を告げているが、人々の交流が活発になると裏腹に流行病が蔓延するのは、中世末のペストの流行（273—274頁）以来繰り返されるパターンであると同時に、500年前に始動した近代世界システムが生態系を巻き込み変化させながら進む側面（287—288頁）の、いまだ未解決の課題を改めて突きつけられたようにも思える。流行の発生源がいにしえのヌエバ・エスパニーヤの地であることに奇しき因縁を感じつつ。

（しいな・ひろし 熊本県立大学）



【書評】

アデライダ・ガルシア＝モラレス『エル・スール』

野谷文昭、熊倉靖子訳、インスクリプト、2009年

森 直香

本書は、ピクトル・エリセ監督の映画『エル・スール』（1983）の原作であり、製作当時、エリセの夫人であったアデライダ・ガルシア＝モラレスの手になるものである。エリセは日本にも根強いファンを持ち、『ミツバチのささやき』（1973）、『エル・スール』などで高い評価を得ている。彼の映画は長い間、ビデオ版、DVD版とともに絶版となっていて入手困難であったが、インターネットのオークションサイトではかなりの高値で取引されていた。ファン

の間には再販を望む声が強く、昨年末、ついに『エル・スール』を含む『ビクトル・エリセDVD BOX』(4枚組)が紀伊國屋書店から発売され、ほぼ同じ時期にこの原作の翻訳も出版された。

主人公の名前が小説版ではアドリアナ、映画版ではエストレリヤと異なっていることをはじめとして小説と映画ではさまざまな違いがある。これらの相違点を男性である映画監督と女性である作家の視点の違いだと解釈することもできるだろうし、あるいはエリセとガルシア＝モラレスの作家としての作風の違いとして比較しながら読んでみるのも興味深いだろう。たとえば、映画は主人公が、姿が見えない父親を探す母の声で目を覚ます場面から始まるが、小説では父の自殺からかなりの時間が経過しており（これは本文の「人の話だと、墓石は割れ目から雑草がのび放題で〔後略〕」という文から明らかである）、主人公が亡き父に「明日夜が明けたら、お父さん、すぐにお墓参りに行きます」と語りかける場面から始まる。小説はアドリアナの回想の形式をとるが、この書き出しへは最初から読者を惹きつけ、主人公と読者の視点を一体化させる。さらに、物語は主人公の視点から一人称で語られるため、われわれ読者が父親に関して得られる情報は制限される。その少ない情報をたよりに、読者は物語が進むにつれ主人公と一緒に父の隠された過去を発見していくことになるが、このような謎解きの要素もこの作品の魅力のひとつであろう。

小説『エル・スール』はさまざまな角度からの読みが可能な作品である。小説は前半では子供時代からの父との思い出、後半ではセビーリヤへの旅行について語られる。子供時代のアドリアナにとって父親はあこがれの対象であり、彼女を無条件で愛してくれる唯一の存在であった。しかしながら、そのかけがえのない父は周囲の人から孤立し、アドリアナは幼いころから父のそうした孤独にも気が付いていた。時が経つにつれ、アドリアナの父に対するイメージが変わり、娘は父の感じる孤独の原因を少しずつ理解し始めるが、この父と娘の関係の変化をアドリアナの成長の過程と重ね合わせて読むこともできる。そして、物語の後半ではアドリアナは父の故郷であるセビーリヤに滞在し、ついに父の秘密を知ることになるが、この旅行はアドリアナの子供時代の終わりを象徴する出来事である。ちなみにこのエピソードは映画では描かれていない。しかし、このエピソードによって映画では分からぬままであった父の自殺の原因が明らかになるのであり、映画版の結末とも言える部分である。

また、物語の中にはさまざまな対比が見られる。南のセビーリヤ出身の父と北のサンタンデール出身の母、無神論者の父に対して信心深い母、主人公一家が暮らす「周りに何もないあの土地」と父の故郷であり「どこか人間臭いところがあり、息づかい、あるいは深くこもった溜息のようなものが感じられる」セビーリヤ、子供時代の思い出の中の理想化された父の姿とその素顔など枚挙にいとまがない。これらの中にスペインが二つに分かれて争った内戦の影を読み取ることもまた可能かもしれない。

このように小説『エル・スール』は多様な読みが可能な作品であり、読み返すごとに新たな発見があることだろう。（もり・なおか 京都外国語大学）



京都外国語大学スペイン語学科編『スペイン語世界のことばと文化 講演録』

〔2007年度版と2008年度版がそれぞれ15部残っております。希望者には
無料でお送りしますので、坂東(s_bando@kufs.ac.jp)までお知らせください。〕

京都外国語大学スペイン語学科編 『スペイン語世界のことばと文化 講演録 2007年度版』

El spaniglish: Origen e impacto en el español de los Estados Unidos, Roberto Negrón
Una visión sociocultural del idioma quechua, Angélica Palomino de Aoki
El lunfardo: Una germanía latinoamericana, Alberto Silva
スペイン語専攻学科の語学教育－日本でできること－ 江澤照美
ラテンアメリカにおけるもうひとつの9・11 立林良一
日本の満州国承認に対するスペイン第二共和制の外交－在東京スペイン人公使の報告書の分析－ 安田圭史
スペイン語・音のトピックス－試みの教授法－ 山崎信三

京都外国語大学スペイン語学科編 『スペイン語世界のことばと文化 講演録 2008年度版』

100年単位のスペイン学 清水憲男
第二次世界大戦期のスペイン公使、須磨彌吉郎－スパイマスターとして、美術コレクターとして 川成洋
長崎県美術館の所蔵する須磨コレクション 森園敦
El álbum ilustrado: Un género literario construido de palabras e imágenes, Eva Mejuto
Del Japonismo al neojaponismo : Una panorámica de la presencia del arte del Japón en España, Elena Barlés Báguena
Francisco de Goya y la experiencia de la guerra, José Ignacio Calvo Ruata
21世紀のスペイン料理－五感から見る「美味」の変遷 渡部万里
セルバンテスの『模範小説集』の翻訳と評価 樋口正義

【新刊書紹介】

2009年1月

相澤正雄、青砥清一共編著『スペイン語実務用語散策 Paseo al términos administrativos españoles』相澤正雄。

2009年2月

銀城康子（文）、マルタン・フェノ（絵）『スペインのごはん』農村漁村文化協会。

佐野誠『「もうひとつの失われた10年」を超えて—原点としてのラテン・アメリカ』新評論。

十勝農業試験場菜豆グループ編、バンチハル絵『インゲンマメの絵本』農村漁村文化協会。

サンティアゴ・ラモン・イ・カハル『脳科学者ラモン・イ・カハル自伝：悪童から探求者へ』小鹿原健二訳、後藤素規編、里文出版。

2009年3月

浅香幸枝編『地球時代の多文化共生の諸相：人が繋ぐ国際関係』行路社。

イサベル・アジェンデ『精霊たちの家』木村栄一訳、池澤夏樹=個人編集 世界文学全集II-07 河出書房新社

加藤隆浩編『ラテンアメリカの民衆文化』行路社。

後藤雄介『語学の西北：スペイン語の窓から眺めた南米・日本文化模様』現代書館。

清水憲男『西語動詞選集：50語の振幅』上智大学イスパニア研究所。

書肆マコンド『ガルシア・マルケス ひとつ話』エディン（発行）、新宿書房（発売）

ラス・カサス『インディアス史』長南実訳、石川保徳編、岩波書店。

山道佳子ほか『近代都市バルセロナの形成：都市空間・芸術家・パトロン』慶應義塾大学出版会。

ヨーロッパと啓蒙主義研究班編著『ヨーロッパと啓蒙主義：その源流と超地域的展開および近代への射程』神戸市外国语大学外国学研究所。

2009年5月

青砥清一編著『スペイン語検定対策4級問題集』白水社。

松森奈津子『野蛮から秩序へ：インディアス問題とサラマンカ学派』名古屋大学出版会。

2009年6月

石井陽一『「帝国アメリカ」に近すぎた国々：ラテンアメリカと日本』扶桑社。

石井洋二郎「第4章 夢の時間—ゴーチエとスペイン」『異郷の誘惑：旅するフランス作家たち』東京大学出版会。

アメリカ・カストロ『葛藤の時代について：スペイン及びスペイン文学における体面のドラマ』本田誠二訳、法政大学出版局。

アルベルト・カンポ・バエザ『光の建築』三好隆之訳、TOTO出版。

桑原真夫『スペインとは ¿Qué es España?』沖積舎。

櫻田大造『対米交渉のすごい国—カナダ・メキシコ・NZに学ぶ』光文社。

立石博高「カディス憲法とスペイン王国」立石博高、篠原琢編『国民国家と市民：包摂と排除の諸相』山川出版社。

ヘンリ・ナウエン『グアテマラ物語 恐怖の国における愛』聖公会出版。

浜松法子、エンリケ・アルマラス・ロモ『スペイン語基本単語辞典：コミュニケーションのための必修単語 2500：DELE 対策』南雲堂フェニックス。

坂東省次『スペインを訪れた日本人—エリートたちの異文化体験』行路社。

ホルヘ・ブカイ、マルコス・アギニス『御者（エル・コチエーロ）—人生の知恵をめぐるライブ対話』八重樫克彦、八重樫由貴子訳、新曜社。

ロベルト・ボラニョ『通話』松本健二訳、白水社。

2009年7月

アンドリュー・ウィートクロフツ『ハプスブルグ家の皇帝たち』瀬原義生訳、文理閣。

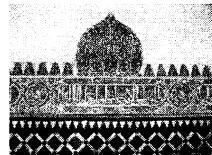
桑原真夫（編訳）『ロサリア・デ・カストロ（上）』行路社。

佐竹謙一『概説 スペイン文学史』研究社。

イブン・ジュバイル『イブン・ジュバイルの旅行記』藤本勝次・池田修監訳、講談社学術文庫。

畠 恵子、山崎眞次編著『ラテンアメリカ世界のことばと文化』成文堂。

ボルヘス『続審問』中村健二訳、岩波書店（岩波文庫）。



国際学会情報

Del 30 al 31 de octubre de 2009.

I Congreso Internacional sobre José Herrera Petere 'Vanguardia y Exilio'. Guadalajara, Salón de actos del Conservatorio de Música, Guadalajara – España

Del 29 al 31 de octubre de 2009.

Coloquio Internacional «El juego con los esteoretipos» 'La redefinición de la identidad hispánica en la literatura y el cine postnacionales'. Universidad de Lovaina. Lovaina (Leuven) – Bélgica

Del 27 al 30 de octubre de 2009.

Congreso Internacional de Poesía Chilena 'Chile mira a sus poetas'. Pontificia Universidad Católica de Chile. Santiago de Chile – Chile

Del 22 al 23 de octubre de 2009.

Simposio Internacional «El diario como forma de escritura y pensamiento en el mundo contemporáneo» Universidad de Zaragoza, Zaragoza – España

Del 22 al 24 de octubre de 2009.

II Coloquio Internacional «Francisco Umbral» 'En los orígenes de la alteridad: Lo femenino en la obra de Francisco Umbral'. Universidad de Pau. Pau – Francia

Del 21 al 24 de octubre de 2009.

Hispanic Linguistics Symposium 2009 (HLS 2009)

Universidad de Puerto Rico, Recinto de Río Piedras. San Juan – Puerto Rico

Del 19 al 20 de octubre de 2009.

X Jornadas Internacionales de Humanismo 'El Humanismo y su pervivencia'. Biblioteca Universitaria de San Isidoro. León – España

Del 19 al 22 de octubre de 2009.

XIII Encuentro Latinoamericano de Facultades de Comunicación Social 'La comunicación en la sociedad del conocimiento: desafíos para la Universidad'. Palacio de Convenciones. La Habana – Cuba

18 de octubre de 2009.

Asturias y los asturianos en la historia: pasado, presente y futuro Franke Institute of the Humanities. Chicago, Illinois – Estados Unidos

Del 14 al 16 de octubre de 2009.

Coloquio Internacional «El bestiario de la literatura latinoamericana (el bestiario transatlántico)» Maison des Sciences de l'Homme et de la Société. Poitiers – Francia

Del 13 al 14 de noviembre de 2009.

18th Colloquium on Hispanic and Luso-Brazilian Literatures and Linguistics 'Merging Textualities, Emerging Paradigms'. University of Texas. Austin – Estados Unidos

Del 13 al 15 de octubre de 2009.

VI Congreso Internacional Chileno de Semiótica 'Crítica y subjetividad: sociedad y semiótica'. Universidad de Concepción. Concepción – Chile

Del 11 al 16 de octubre de 2009.

VIII Congreso Latinoamericano de la Asociación Latinoamericana de Estudios del Discurso (ALED) 'Miradas multi/trans-disciplinarias a los estudios del discurso'. Universidad Autónoma de Nuevo León. Monterrey, Nuevo León – México

Del 8 al 10 de octubre de 2009.

IV Congreso de la Asociación Ibérica de Estudios de Traducción e Interpretación (AIETI) Universidad de Vigo. Vigo – España

Del 5 al 7 de octubre de 2009.

II Congreso Nacional de la Cátedra UNESCO para la Lectura y Escritura "Leer y escribir en la universidad y en el mundo laboral". Universidad de Los Lagos. Osorno – Chile

Del 5 al 8 de octubre de 2009

X Congreso Internacional sobre el Exilio 'El exilio en primera persona'. Bilbao-San Sebastián. – España

Del 4 al 7 de octubre de 2009.

VII Congreso Internacional de Lingüística Hispánica (CILH2009) Universidad de Leipzig.

Leipzig – Alemania

Del 2 al 4 de octubre de 2009.

V Encontro Brasileiro de Profissionais de Español (ENBRAPE) Instituto Cervantes. Belo Horizonte – Brasil

Del 1 al 3 de octubre de 2009.

XIX Congreso de la Asociación Internacional de Literatura Femenina Hispánica (AILFH) 'Memoria y frontera'. Facultad de Ciencias Sociales. Quito – Ecuador

Del 24 al 27 de noviembre de 2009.

VI Congreso Internacional de la Asociación Nacional de Investigación de Literatura Infantil y Juvenil (ANILIJ) 'La oralidad y el mito. Rescate de la imaginación infantil y juvenil en el siglo XXI'. Guadalajara – México

Del 24 al 27 de noviembre de 2009.

Festival - Congreso Internacional de Literatura de Perú 2009 III Congreso Nacional de Estudiantes de Literatura, CONELIT 2009. Universidad Nacional Mayor de San Marcos. Lima – Perú

Del 23 al 27 de noviembre de 2009.

Conferencia Internacional Lingüística 2009 Instituto de Literatura y Lingüística "José Antonio Portuondo Valdor". La Habana – Cuba

Del 21 al 22 de noviembre de 2009.

I Congreso de Español como Lengua Extranjera en Asia-Pacífico (CE/LEAP) 'El currículo de Español / LE'. Instituto Cervantes. Manila – Filipinas

Del 19 al 21 de noviembre de 2009.

I Jornadas de Cultura, Lengua y Literatura Coloniales Universidad de California. Los Ángeles – Estados Unidos

Del 16 al 19 de noviembre de 2009.

I Congreso Internacional sobre el Caribe 'El mito de la mujer caribeña'. Getafe, Madrid – España

Del 11 al 15 de noviembre de 2009

Annual Conference of the American Society for Theatre Research and the Theatre Library Association 'Theatre, Performance, DestiNation'. San Juan – Puerto Rico

Del 11 al 13 de noviembre de 2009.

Congreso Internacional «Tradición e innovación: nuevas perspectivas para la edición y el estudio de documentos antiguos». Centro de Ciencias Humanas y Sociales (CSIC). Madrid – España

Del 11 al 13 de noviembre de 2009.

XXII Coloquio Internacional de Literatura Mexicana e Hispanoamericana Universidad de Sonora. Hermosillo, Sonora – México

Del 11 al 13 de noviembre de 2009.

II Congreso Internacional de Lingüística Clínica Edificio de Humanidades, UNED. Madrid – España

Del 5 al 7 de noviembre de 2009.

XXII Encuentro Nacional de Investigadores del Pensamiento Novohispano Universidad de Guanajuato. Mineral de Valenciana, Guanajuato – México

Del 5 al 7 de noviembre de 2009.

IX Biennial Conference of the Society for Renaissance & Baroque Hispanic Poetry Universidad de Oregon. Eugene – Estados Unidos

Del 4 al 6 de noviembre de 2009.

Simposio Internacional «El ensayo: hacia el bicentenario de su aparición en Hispanoamérica» 'Balances, revisiones y porvenir de un género fundacional'. Universidad Nacional de Cuyo. Mendoza – Argentina

Del 3 al 6 de noviembre de 2009.

VII Congreso Internacional de la Sociedad Española de Historiografía Lingüística (SEHL) Universidade de Trás-os-Montes e Alto Douro. Vila Real – Portugal

Del 16 al 19 de diciembre de 2009.

IV Congreso Internacional «El exilio republicano de 1939 y la segunda generación» Universitat Autònoma de Barcelona. Bellaterra-Cerdanyola del Vallès, Barcelona. – España

Del 2 al 4 de diciembre de 2009.

XI Simposio Internacional de la Sociedad Española de Didáctica de la Lengua y la Literatura (SEDLL) 'Selección, desarrollo y evaluación de competencias en Didáctica de la Lengua y la Literatura'. Facultad Ciencias de la Educación. Sevilla – España

Del 25 al 27 de enero de 2010.

Congreso Internacional «El duque de Lerma: mecenazgo y literatura en el Siglo de Oro» Lerma, Burgos – España

Del 25 al 27 de febrero de 2010.

Congreso Internacional Juana I 'V Centenario de la llegada de la Reina Juana I a Tordesillas'. Casas del Tratado. Tordesillas, Valladolid – España

Día 19 de febrero de 2010.

Anarquismo y sexualidad en países hispanohablantes y lusófonos University of Leeds.
Leeds – Reino Unido

Del 29 de marzo al 2 de abril de 2010.

VII Coloquio y Festival Internacional de Música y Poesía «Nicolás Guillén» 'Desigualdades y diversidades'. La Habana – Cuba

Del 2 al 6 de marzo de 2010.

V Congreso Internacional de la Lengua Española (CILE) 'América en lengua española'. Valparaíso – Chile

Del 27 al 30 de abril de 2010.

IX Congreso Argentino de Hispanistas 'El hispanismo ante el Bicentenario'. Facultad de Humanidades. La Plata – Argentina

Del 21 al 23 de abril de 2010.

Congreso Internacional «La dictadura franquista: la institucionalización de un régimen» Pavelló de la República. Barcelona – España

Del 1 al 3 de abril de 2010.

Seventh Biennial Florida International University Conference on Spanish and Spanish-American Cultural Studies 'La literatura y el cine hispánicos en el bicentenario de las independencias latinoamericanas (1810-2010)'. Florida International University. Miami – Estados Unidos

Del 27 al 30 de mayo de 2010.

V Coloquio Internacional sobre la Historia de los Lenguajes Iberrománicos de Especialidad 'Comunicación y transmisión del saber entre lenguas y culturas'. Universidad de Leipzig. Leipzig – Alemania

Del 12 al 14 de mayo de 2010.

Religion in the Hispanic Baroque: The First Atlantic Culture and its Legacy Foresight Center. Liverpool – Reino Unido

Del 10 al 12 de mayo de 2010.

Herrialde Katalanak - Euskal Herria: Elkarbidea Nazioarteko Kongresua / Congrés Internacional «País Basc - Països Catalans: Camins de Trobada» acultat de Lletres / Letren Fakultatea / Facultad de Letras. Vitoria-Gasteiz – España

Del 5 al 7 de mayo de 2010.

Coloquio Internacional «Marcadores del discurso en las lenguas románicas» Universidad Complutense de Madrid. Madrid – España

Del 30 de junio al 2 de julio de 2010.

International Conference Europhras 2010 'Cross-Linguistic and Cross-Cultural Perspectives on Phraseology and Paremiology'. Universidad de Granada. Granada – España

Del 30 de junio al 3 de julio de 2010.

VI Congreso Europeo CEISAL de latinoamericanistas Universidad de Toulouse II, Le Mirail. Toulouse – Francia

Del 23 al 25 de junio de 2010.

Congreso Internacional «Del barroco al neobarroco: realidades y transferencias culturales» Universitas Castellae. Valladolid – España

2009 年度 第 55 回大会のお知らせ

下記のように、2009 年度第 55 回大会を開催いたします。詳細は別途お送りするプログラムまたはホームページでご確認ください。

開催日：2009 年 10 月 10 日（土）、11 日（日）

会 場：静岡県立大学 （〒422-8526 静岡市駿河区谷田 52-1）

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

特別企画『ドン・ファン』観劇（10 月 10 日（土）於静岡芸術劇場）

チケット（本会会員用特別料金）3,150 円

SPAC(静岡県舞台芸術センター)は、その活動の一環として今秋「SPAC 秋のシーズン 2009」と題し、ヨーロッパ演劇界を席巻するコロンビア人演出家オマール・ポラスを招聘し、SPAC 所属俳優とのコラボレーションにより『ドン・ファン』を公演します。これはスペイン黄金世紀演劇の代表作『セビーリャの色事師と石の招客 *El Burlador de Sevilla y Convidado de piedra*』の『ドン・ファン』です。

ポラス率いる劇団「テアトロ・マランドロ」はこの『ドン・ファン』を 2005~2006 年にかけてスイス、フランス各地で巡回公演し、圧倒的な評価を得ました。ポラスにとってこの作品は、自らの文化的ルーツであるスペインのコメディアを再発見する試みとも言え、国を問わず幅広い年齢層に楽しめる演出となっています。仮面をつけた俳優が身体技術を駆使し、軽快な音楽を使った奇抜で陽気な夢幻劇に仕上がる予定です。

終演後、演出家によるアフタートークを行います。

LV Congreso Anual (2009)

Fecha : sábado 10 y domingo 11 de octubre de 2009

Lugar : Universidad Provincial de Shizuoka

(〒422-8526 Yada 52-1, Suruga, SHIZUOKA)

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

Evento especial: Función del Teatro “Don Juan”, 10 de octubre en el Teatro Artístico de Shizuoka (Tarifa especial para los miembros de AJH: ¥3,150)

SPAC (el Centro de las Artes Interpretativas de Shizuoka, the Shizuoka Performing Arts Center) celebra el “Programa Otoñal de SPAC 2009” y representa *Don Juan*, invitando al director revolucionario Omar Porras (colombiano de origen) en colaboración con los actores del Centro.

Este *Don Juan* es del Siglo de Oro español (*El burlador de Sevilla y convidado de piedra*) y una de las obras más representativas de Omar Porras, quien la puso en escena con su propia compañía Teatro Malandro y emprendió una gira teatral por varios locales de Suiza y Francia los años 2005 y 2006, con la que le concedieron valoraciones incomparables. Para Porras el *Don Juan* es un intento de reivindicar el valor de la comedia española, que es el origen cultural de sí mismo, y, por lo tanto, su puesta en escena será tan divertida que la puede disfrutar el público de todos los países y de todas las edades. Usted verá en el Teatro de Shizuoka el mundo clásico de *Don Juan* creado por los actores con máscaras que se mueven haciendo pleno uso de su cuerpo en el escenario.

Se celebrará un coloquio con Omar Porras y otros especialistas después de la función.

【編集後記】

会報 15 号が刊行の運びとなりましたので、会員の皆様方にお送りいたします。一読いただければ幸いです。今号でも、巻頭言をはじめ多数の方に玉稿をお寄せいただきました。この場をお借りして厚くお礼を申しあげます。

前号に引き続いて今号でも、国際学会情報を多数掲げております。会員の皆様が世界の各地で開催されます国際学会に参加されるために、少しでもお役に立てれば幸いです。日本イスパニヤ学会の大会も、来る 10 月 10 日と 11 日に静岡県立大学で開催されます。興味深いイベントや研究発表が予定されていますので、奮ってご参加ください。

すでにご案内のように、今年は「御宿：友好 400 年」の年にあたります。来年はといいますと、スペイン語圏に関する記念行事は他にもあると思いますが、フランシスコ・ザビエル亡き後、日本で布教活動に精力的に取り組んだコスメ・デ・トーレス生誕 500 年を迎えます。結城了悟著『長崎を開いた人 コスメ・デ・トーレスの生涯』(改訂版、中央出版会、2007 年)などを参考にして、トーレスの故郷バレンシアに親戚縁者がいないものか熊本の方が搜しておりますので、ご存知の方がおられましたら、ご一報ください。(坂東)